

2025年2月19日

Press Release

開館5周年記念展

ニュー・ユートピア

——わたしたちがつくる新しい生態系

Plastic Utopia: Our New Ecosystem

会期：1期 | 2025年4月4日（金）－7月7日（月）

2期 | 2025年7月11日（金）－11月16日（日）

会場：弘前れんが倉庫美術館（青森県弘前市）

出品作家：川内理香子、小林エリカ、ユーイチロー・E・タムラ、渡辺志桜里、SIDE CORE、

工藤麻紀子、奈良美智、佐藤朋子、さとうりさ

ナウイン・ラワンチャイクン、ジャン＝ミシェル・オトニエル、藤井光、大巻伸嗣、斎藤麗、

永野雅子、細川葉子、畠山直哉、和田礼治郎、蜷川実花*、松山智一**ほか

*1期のみ **2期のみ



弘前れんが倉庫美術館では、2025年4月4日（金）から11月16日（日）まで、開館5周年記念展「ニュー・ユートピア——わたしたちがつくる新しい生態系」を開催します。

街の中につくりだす、
わたしたちの新しい生態系<ユートピア>

当館は、2020年の開館から今年で5周年を迎えます。展覧会「ニュー・ユートピア」は、開館5周年を記念して、未来をうらなう若いアーティストたちの作品と、1万5千年をさかのぼるともいわれる津軽地方の人間の営みに連なる作品を織り交ぜながら、わたしたちがつくりだす新しい生態系について考えようとする展覧会です。

「どこにもないところ」という意味のギリシャ語に由来する「ユートピア」は、16世紀イギリスの思想家、トマス・モアの著作に登場する架空の国家の名前です。モアは、共通の価値観を持つ人々が暮らす、理想の場所としてユートピアを描き出しました。一方で、ひとりひとりが異なる価値観で生きる現代社会において、個人が探し求める理想の場所のあり方はますます多様になっています。

わたしたちは、大小さまざまな「生態系」の一部としてこの世界を生きています。現在、「生態系」という言葉は、自然環境における命の循環の仕組みを示す本来の意味を超えて、人間の知的・文化的な活動によって影響を受けた、都市生活の構造に対しても用いられることがあります。わたしたちはいわば、自分たちの生きる世界（社会的な生態系）を自らつくり出すことができる創造主にもなり得るのです。

ここに登場するのは、食べ物とそれを取り込む身体や、人間と動物が重なりあうような神話的なイメージを描き出す川内理香子の絵画や刺繍、外来種を含む動植物が生息する水槽をつないで循環させることで、生き物が影響し合うあらたなシステムを作り出す渡辺志桜里のインスタレーション、さまざまな場所の地下空間を滑走するスケーターたちを捉え、普段は目に見えない巨大な地下都市の存在を浮かび上がらせるSIDE COREの映像作品などです。本展を通じて、自分たちそれぞれにとって、遠い理想郷ではない未来のユートピアとは何か、考えるきっかけになることを目指します。



川内理香子《PIC-NIC》2024年
©Rikako Kawauchi, courtesy of the artist and WAITINGROOM

広報に関するお問い合わせ

弘前れんが倉庫美術館 広報担当：大澤、石川

TEL：0172-32-8950 FAX：0172-55-5982 E-mail: press@hirosaki-moca.jp 〒036-8188 青森県弘前市吉野町 2-1

展覧会のみどころ

1. 注目の女性作家たちの新作を紹介

本展の参加作家たちは、自分自身の身体や動植物を含む他者の存在、土地の歴史と向き合うことであらたな関係性を築いています。どこか遠くにあるのではなく、私たちの身近な世界にひろがる、ユートピアのさまざまな形を示す作品を紹介します。

川内理香子は、自らがコントロールできないものへの意識から、身体に取り込まれる食べものや、他者と自分自身の関係性を示すようなイメージを作品に取り入れます。身体の力強い動きの痕跡がとどめられたドローイングや塗り重ねられた絵の具の層を彫りこむように描かれたペインティングをはじめ、複数のジャンルを横断して制作を行っています。本展では、2024年から新たに取り組む、刺繍作品の大型新作を発表します。

また、**佐藤朋子**は、昨年度より継続的に弘前の街中や近郊の地域でリサーチをかさね、「語り」を取り入れたレクチャー形式の新作を発表します。かつて弘前に設置された旧陸軍第八師団の痕跡や、岩木山の安寿の伝説にまつわる、津軽の歴史や自然、信仰をめぐる物語が展開します。

2. 弘前を中心とする津軽地方の歴史と生態系を知る

渡辺志桜里は、わたしたちの日常生活の隣に息づく新旧の生態系に目を向けます。本展では、植物、魚、バクテリアなどを生育する水槽を繋ぎ合わせ、水を循環させることで生態系を可視化させる渡辺の代表作《サンルーム》の新作を、この土地の生物たちに焦点をあてて発表。東日本最古で最北の稲作跡が残るといわれる津軽地方には、先史時代から、大陸やアジアや太平洋の島々との繋がりをを見つけることができます。また、近代化の過程で新たに外来種としてこの土地に生息するようになった動植物の存在には、制度の中で「固有種」や「外来種」として、同じ土地に生きる生物間にも線引きがなされるわたしたちの世界のあり様が見えてきます。

3. 展覧会のテーマに応答するコレクション、地域の歴史や文化にまつわる資料も展示

弘前れんが倉庫美術館は、2020年の開館から現在まで、コミッション・ワークを中心に、現代の作家たちの作品を収蔵してきました。本展では、展覧会のテーマに応答するコレクション作品を交えて構成します。旧陸軍第八師団の軍医であった祖父と、弘前生まれの父の人生と土地の歴史をテーマに、フィクションとドキュメンタリーが入り混じった物語が展開する小林エリカのインスタレーション、青森に複数の遺跡がある縄文時代の土器に着想を得た大巻伸嗣の版画作品など、津軽地方の風土、歴史、民俗、文化との出会いから生まれたコレクションを紹介します。さらに、こぎん刺しや土器といった、地域の歴史や文化にまつわる資料も現代の作家たちの作品とともに紹介することで、津軽地域で育まれてきた創造性や、人々の交流や移動の歴史に光をあてます。



[参考図版] 渡辺志桜里 《堆肥国家》2024年
Photo: Naohiro Ogawa



[参考図版] 佐藤朋子 新作のためのイメージ

出品作品介绍



小林エリカ《誕生》（《旅の終わりは恋するもの巡り逢い》より）2021年
弘前れんが倉庫美術館蔵



工藤麻紀子《春の山をのみこむ》2023年
Photo by Kenji Takahashi
© Makiko Kudo, Courtesy of Tomio Koyama Gallery



奈良美智《Girl from the North Country (study)》2025年
©Yoshitomo Nara
Courtesy of Yoshitomo Nara Foundation



【参考図版】ユーイチロー・E・タムラ《草上の休息》2024年



SIDE CORE 《under city》ongoing, Courtesy of SIDE CORE



蜷川実花《花、瞬く光》2022年
©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery



大巻伸嗣《Abyss - Jomon》2023年 Photo: Keizo Kioku

作家略歴

川内理香子 かわうちりかこ **新作発表**

1990年東京都生まれ。同地在住。2017年多摩美術大学大学院・美術学部・絵画学科・油画専攻修了。食への関心を起点に、身体と思考、それらの相互関係の不明瞭さを軸に、食事・会話・セックスといった様々な要素が作用し合うコミュニケーションの中で見え隠れする、自己や他者を作品のモチーフとする。ドローイングやペインティングをはじめ、針金や樹脂、ネオン管や大理石など、多岐にわたるメディアを横断して作品を制作。



Photo: Seiichi Saito

渡辺志桜里 わたなべしおり **新作発表**

1984年東京都生まれ。東京都在住。2017年東京藝術大学美術学部彫刻科大学院を修了。植物、絶滅危惧種を含む魚、バクテリアなどを生育する水槽を繋ぎ合わせ、その水を循環させる代表作《サンルーム》をはじめとしたインスタレーションを発表。生物全体の種の絶滅・保護・排除の関係性、生態系の視点から見た国家という共同体、民俗の慣習や祭事に潜在する自然と人間との営みなどをテーマに制作を行う。人間以外の存在の視点への関心から能の制作にも携わる。



佐藤朋子 さとうともこ **新作発表**

1990年長野県生まれ、神奈川県在住。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。レクチャーの形式を用いた「語り」の芸術実践を行っている。日本が辿った近代化への道のりや歴史の複数性への関心と、各地の伝説や遺跡などへの興味からリサーチを行い、フィクションとドキュメントを行き来する物語を構築する。2024年度に参加した当館のプロジェクト「弘前エクステンジ#06『白神視見考（しらかみのぞきみこう）』」でのリサーチをもとに、新作を発表。



Photo: Ryusuke Ohno

小林エリカ こばやしえりか

1978年東京都生まれ。東京都在住。目に見えない物、時間や歴史、家族や記憶、場所の痕跡から着想を得て、リサーチに基づく史実とフィクションからなる作品を幅広く手がける。当館の2021年度の展覧会「りんご前線—Hirosaki Encounters」に参加し、テキストを軸に展開するインスタレーションを発表。第二次世界大戦中に風船爆弾作りに動員された少女たちについての著作『女の子たち風船爆弾をつくる』などの小説、マンガでも数多くの賞を受賞している。



ユーイチロー・E・タムラ

既存のイメージやオブジェクトを起点に、多彩なメディアを横断し、現実と虚構を交差させて多層的な物語を構築する田村友一郎によるアルファベットのEを起点としたライン。もしくはその態度。現代社会が抱える環境（Environment）や経済（Economy）、生態学（Ecology）や民族学（Ethnology）、ときに教育的（Educational）な態度によって体系づけられる作品は、エロス（Eros）や悪魔性（Evil）を帯びる。



SIDE CORE さいどこあ

2012年より活動を開始。東京を拠点に、ストリートアートを切り口とした展覧会やイベントなどの活動を展開している。メンバーは高須咲恵、松下徹、西広太志。映像ディレクターとして播本和宜が参加。公共空間におけるルールを紐解き、思考の転換、隙間への介入、表現やアクションの拡張を目的に、ストリートカルチャーを切り口として「都市空間における表現の拡張」をテーマに屋内・野外を問わず活動している。



Photo: Shin Hamada

工藤麻紀子 くどう まきこ

1978年青森県五所川原市生まれ。神奈川県在住。2002年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒業。季節や時間による光の変化から、いつもの散歩道が「急に光って見える」瞬間や、ふと頭に思い浮かぶ行ったことがある場所、川や水辺、草花の匂い、風、虫の羽音、動物、思春期の少年少女、夜にみた夢など、日常の生活の中のなにげない事柄を受け止め、現実と心象風景を再構築して、鮮やかな夢のような世界を描き出した絵画を制作。



Photo: Kenji Takahashi

奈良美智 なら よしとも

1959年青森県弘前市生まれ。栃木県在住。愛知県立芸術大学大学院修士課程修了後にドイツへ渡り、国立デュッセルドルフ芸術アカデミーで学ぶ。2000年代以降、日本を代表する画家・彫刻家として、国内外で多くの個展を開催する。弘前市では2002年、2005年、2006年の3回にわたり、吉井酒造煉瓦倉庫（現弘前れんが倉庫美術館）で、市民を主体とした実行委員会が結成され、大勢のボランティアスタッフによって大規模な個展を開催し成功をおさめた。



Photo: RYOICHI KAWAJIRI
Artwork: ©Yoshitomo Nara

さとうりさ

1972年東京都生まれ。神奈川県在住。1999年東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了。抽象的でありながらも親しみを感じさせる大型のソフト・スカルプチャーを、屋内外を問わず公共のスペースに出現させる。空気で膨らむオブジェの制作では模型から縫製までを自身の手で行う。各地域でのワークショップでの共同制作も数多く行っており、作品を通じたコミュニケーションの可能性を考察する。近年は絵本の制作、翻訳なども手掛ける。



Photo: Seiichiro Sato

開館5周年を迎えて

地域で親しまれた煉瓦倉庫が現代美術館に

当館は、明治・大正時代に酒造工場として建設され、戦後はシードル工場として使われた築100年以上の歴史的な建物を改修し、2020年に開館しました。2000年代、美術館になる前の建物で、奈良美智の展覧会が三度にわたり開催されたことが大きなきっかけとなり、美術館の誕生へとつながりました。建物は「記憶の継承」をコンセプトに、建築家の田根剛が改修の建築設計を担いました。



©Naoya Hatakeyama

開館以来多様なプログラムを開催

開館以来、国内外のアーティストたちを紹介する年間2本の企画展をはじめ、地域の創造的魅力を再発見することを目指すプログラム「弘前エクスチェンジ」やラーニングプログラムを実施しています。映画上映、音楽ライブなどの多様なイベントの開催、施設貸出などにも取り組み、これまでに延べ27万人を超える来館者を迎えています。コレクションとしては、当館のために制作されたコミッション・ワークを中心に、現時点で国内外のアーティスト25組、計167点の作品を収蔵しています。

【これまでに開催した企画展】

2020年：「Thank You Memory — 醸造から創造へ —」「小沢剛展 オールリターン—百年たったら帰っておいで 百年たてばその意味わかる」

2021年：「りんご宇宙 — Apple Cycle / Cosmic Seed」「りんご前線 — Hirosaki Encounters」

2022年：「池田亮司展」「『もしもし、奈良さんの展覧会はできませんか？』奈良美智展弘前 2002-2006 ドキュメント展」

2023年：「大巻伸嗣—地平線のゆくえ」「松山智一展：雪月花のとき」

2024年：「蛭川実花展 with EiM：儂くも煌めく境界 Where Humanity Meets Nature」「タグチアートコレクション×弘前れんが倉庫美術館 どうやってこの世界に生まれてきたの？」

開館5周年のテーマ「キニナル ヒロサキ・キニナル アート」

「キニナル」には、「気になる」と「木に（実が）なる」というふたつの意味を込めています。「キニナル」という好奇心は、今まで知らなかった世界に触れる原動力を生み出します。当館は、展覧会や地域連携イベントなど複数のプログラムを行うことで、常に新しい表現、モノ、コト、人に出会える場所となることを目指します。

弘前れんが倉庫美術館では、弘前に暮らす人々にも初めてこの地を訪れた人たちにも、作品やさまざまなプログラムが、改めてわたしたちの社会を知る場となり、次の時代を育むエネルギーに結実していくことを願っています。みなさんが気になる美術館になること、多くの人が足を運びたい美術館になること、そこから人や地域や文化が育つこと。地域とともに育つ美術館として、記憶の担い手であるとともに、未来の記憶のつくり手になることを目指します。

5周年記念ロゴ

当館のロゴ・VIを担当したグラフィック・デザイナーの服部一成が5周年記念ロゴを新たにデザインしました。100年後に続く歴史の、最初の5年を告げるデザインです。



本展関連プログラム

アーティスト・リレートーク

日時 | 2025年4月5日(土)
13:00-13:40 渡辺志桜里
13:40-14:20 川内理香子
14:20-15:00 佐藤朋子

会場 | 展示室内
料金 | 無料(要当日観覧券)
申込み | 不要



左から：渡辺志桜里、川内理香子 (Photo: Seiichi Saito)、佐藤朋子 (Photo: Ryusuke Ohno)

学芸スタッフによる解説ツアー

当館学芸スタッフが展覧会の見どころを紹介します。

日時 | 2025年4月27日(日)、5月18日(日)、6月22日(日)、7月27日(日)、8月17日(日)、9月21日(日)、10月19日(日)、11月9日(日) 各日 11:00-11:30

料金 | 無料(要当日観覧券)

申込み | 不要

集合場所 | 1階 受付前

蜷川実花《Embracing Lights》特別上映会

桜の季節にあわせて、2024年当館で個展を行った蜷川実花の映像作品《Embracing Lights》(6分46秒)をスクリーンで上映します。

日時 | 2025年4月5日(土)・6日(日)・15日(火)・22日(火)・26日(土) - 29日(火・祝)、5月3日(土) - 5日(月・祝)
各日 10:00-17:00 ※ループ上映

会場 | スタジオB

料金 | 無料

申込み | 不要



蜷川実花《Embracing Lights》2023年
©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

5周年！れんがひろばのアートフェス

開館5周年を記念して、アーティストのさとうりさによる屋外での作品展示や音楽ライブ、SIDE COREのアーティスト・トーク、クリエイターの舞台、ナイト・ミュージアム、ワークショップなどを開催します。

日程 | 2025年7月11日(金) - 13日(日) 3日間

アーティスト・トーク SIDE CORE

日程 | 2025年7月12日(土)

さとうりさによるワークショップ「からっぽ探検隊！」

日時 | 2025年7月13日(日) 14:00-15:00
会場 | 土淵川吉野町緑地(弘前れんが倉庫美術館前"れんがひろば")
料金 | 無料
申込み | 事前予約優先

ナイト・ミュージアム

展示室の開館時間を延長します。

日時 | 2025年7月11日(金)・12日(土) 両日 20:00まで



[参考図版] さとうりさ《本日も、からっぽのわたし #3 (月と心臓)》2024年
越後妻有里山現代美術館 MonET 展示風景

ラーニングプログラム

プレイフルワークショップ 「コミュかん ～展覧会をみて・話して・共有する～」

演劇的手法を活用し、グループでの対話などを通じて、作品をみて感じたこと、思ったことを共有しながら作品を鑑賞するワークショップです。8月は障がいのある人にも参加いただけるプログラムになります。

日程 | 2025年6月22日(日) *一般向け、8月3日(日) *バリアフリープログラム 両日 13:30-15:30

会場 | 展示室、スタジオB

対象 | 中学生以上

定員 | 10名

料金 | 無料(要当日観覧券)

講師 | 太田歩(演劇ユニット 一揆の星)

申込み | 事前予約優先

プレイフルワークショップ 「おはなしスケッチ」

ロック喫茶「JAIL HOUSE 33 1/3」を題材に、建てられた当時の写真資料から、即興での会話劇を創作するワークショップです。

日程 | 2025年8月23日(土) 13:50-15:30

会場 | 展示室、スタジオB

対象 | 中学生以上

定員 | 12名

料金 | 無料(要当日観覧券)

講師 | 藤島和弘(演劇ユニット 一揆の星)

申込み | 事前予約優先



ロック喫茶「JAIL HOUSE 33 1/3」再現展示
一般財団法人奈良美智財団蔵
弘前れんが倉庫美術館での展示風景
Photo: Keizo Kioku

その他のプログラム

H-MOCA レクチャー

当館学芸スタッフによる現代アート講座です。

日時 | 2025年8月9日(土)、9月13日(土)、10月11日(土) 各日 14:00-15:00

会場 | ライブラリー

料金 | 無料

定員 | 20名

申込み | 事前予約優先

「れんが倉庫部」による建築ガイドツアー

当館のボランティアプログラム「れんが倉庫部」の部員がガイド役となり、館内を巡りながら建物の歴史や見どころを解説します。

日時 | 2025年4月19日(土)、5月17日(土)、6月21日(土)、7月19日(土)、8月16日(土)、9月20日(土)、10月18日(土)、11月15日(土) 各日 11:00-11:30

料金 | 無料

申込み | 不要

集合場所 | 1階 エントランス

H-MOCA ライブ 前野健太「営業中」

出演 | 前野健太

日時 | 2025年5月31日(土) 18:30開場 19:00開演

会場 | cafe & shop BRICK (当館隣接)

料金 | 予約 4,000円、当日 4,500円(別途ドリンク代)

定員 | 60名

共催 | cafe & shop BRICK

このほかさまざまなプログラムを予定しています。申込み方法・詳細はウェブサイトをご覧ください。

開催概要

- 展覧会名（日本語）：開館5周年記念展 ニュー・ユートピア——わたしたちがつくる新しい生態系
- 展覧会名（英語）：5th Anniversary Exhibition, *Plastic Utopia: Our New Ecosystem*
- 会期：1期 | 2025年4月4日（金）－7月7日（月）
2期 | 2025年7月11日（金）－11月16日（日）
- 会場：弘前れんが倉庫美術館（青森県弘前市吉野町2-1）
- 開館時間：9：00－17：00（入館は閉館の30分前まで）
- 休館日：火曜日（ただし4/15・22・29、5/6、8/5、9/23は開館）、
5月7日（水）、7月9日（水）・10日（木）、9月24日（水）
- 観覧料 [税込]：一般 1,500円（1,400円） 大学生・専門学校生 1,000円（900円）
高校生以下 無料
- ※（ ）内は20名様以上の団体料金
※弘前市民は当日料金から500円引き（他の割引との併用不可）
※その他以下の方は無料
弘前市内の留学生の方／満65歳以上の弘前市民の方／ひろさき多子家族応援パスポートをご持参の方／障がいのある方と付添の方1名
- 主催：弘前れんが倉庫美術館
- 特別協賛：つみえ基金、スターツコーポレーション株式会社
- 協賛：株式会社大林組、株式会社NTTファシリティーズ
- 後援：東奥日報社、デーリー東北新聞社、陸奥新報社、青森放送、青森テレビ、青森朝日放送、エフエム青森、FMアップルウェーブ、弘前市教育委員会
- 一般問合せ：TEL 0172-32-8950
- アクセス：JR弘前駅より
-弘南バス・土手町循環100円バス「中土手町」下車 徒歩約4分
-徒歩約20分
-タクシー約7分
当館には駐車場はございません
公共交通機関をご利用いただくか、近隣の有料駐車場をご利用ください
- ウェブサイト：展覧会ページ https://www.hirosaki-moca.jp/exhibitions/plastic_utopia/
美術館 <https://www.hirosaki-moca.jp/>
- SNS：Instagram/Threads @hirosaki_moca
X @hirosaki_moca
Facebook @hirosaki.moca

広報に関するお問い合わせ

弘前れんが倉庫美術館 広報担当: 大澤、石川
TEL：0172-32-8950 FAX：0172-55-5982 E-mail: press@hirosaki-moca.jp 〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1

2025年2月19日

弘前れんが倉庫美術館 E-MAIL: press@hirosaki-moca.jp / FAX: [0172-55-5982](tel:0172-55-5982) 宛

弘前れんが倉庫美術館 開館5周年記念展

「ニュー・ユートピア——わたしたちがつくる新しい生態系」

広報画像申請書

会期：2025年4月4日（金） - 11月16日（日） 会場：弘前れんが倉庫美術館

▼貴媒体についてお知らせください

媒体名	貴社名	
ご担当者名	所属部署	
ご住所 〒		
TEL	FAX	E-MAIL
掲載・放映予定日 月 日	<input type="checkbox"/> 読者プレゼント（招待券）を希望する	組 名様（2025年10月末迄掲載対象）

* 画像1点以上ご掲載の場合、本展の招待券10枚まで提供します。 / 美術館までの交通費は自己負担のご案内をお願いします。

▼ご希望画像の番号に○印をつけてください。ご使用の際は所定のキャプション・クレジットの記載をお願いします。

広報画像 キャプション・クレジット

- 川内理香子《PIC-NIC》2024年 ©Rikako Kawauchi, courtesy of the artist and WAITINGROOM
- [参考図版] 渡辺志桜里《堆肥国家》2024年 Photo: Naohiro Ogawa
- [参考図版] 佐藤朋子 新作のためのイメージ
- SIDE CORE 《under city》ongoing, Courtesy of SIDE CORE
- [参考図版] ユーイチロー・E・タムラ《草上の休息》2024年
- 小林エリカ《誕生》（《旅の終わりは恋するものの巡り逢い》より）2021年 弘前れんが倉庫美術館蔵
- 工藤麻紀子《春の山をあみこむ》2023年 Photo by Kenji Takahashi © Makiko Kudo, Courtesy of Tomio Koyama Gallery
- [参考図版] さとうりさ《本日も、からっぽのわたし #3（月と心臓）》2024年 越後妻有里山現代美術館 MonET 展示風景
- 蜷川実花《花、瞬く光》2022年 ©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery
※本作展示は1期 [2025年4月4日（金） - 7月7日（月）] のみ
- 奈良美智《Girl from the North Country (study)》2025年 ©Yoshitomo Nara Courtesy of Yoshitomo Nara Foundation
※本画像の提供は事前に原稿を確認させていただける場合に限りです。
- ※5周年記念ロゴ画像を掲載いただく場合は、キャプション・クレジットは不要です
- ©Naoya Hatakeyama

▼広報画像の掲載について

- ・ 広報画像の使用は展覧会をご紹介いただく場合のみとさせていただきます。
- ・ 広報画像をご掲載いただく場合、所定のキャプション・クレジットを必ず記載してください。
- ・ 全図で使用してください。トリミング、変形、部分使用、文字のせはご遠慮ください。
- ・ 掲載記事、番組内容については、基本情報確認のため、可能な範囲でゲラ刷り・原稿の段階で広報担当までメールまたはFAXでお送りください。

広報に関するお問い合わせ

弘前れんが倉庫美術館 広報担当：大澤、石川

TEL：0172-32-8950 FAX：0172-55-5982 E-mail：press@hirosaki-moca.jp 〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1

▼広報画像一覧

1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



※奈良美智氏の作品画像の提供は、事前に原稿を確認させていただける場合に限りです。

広報に関するお問い合わせ

弘前れんが倉庫美術館 広報担当：大澤、石川

TEL：0172-32-8950 FAX：0172-55-5982 E-mail：press@hirosaki-moca.jp 〒036-8188 青森県弘前市吉野町 2-1